

## 普通のインターンシップとはひと味違う制度を持つ「企業」も

IT系で企業活用というインターンシップ制度が思い浮かぶ。現場を体感できる制度としてここ数年実施企業が増え、着実に裾野が広がった。一方、従来型の実務経験にひと地りを加えた制度も誕生、企業と学生の接点が多様化してきた。

たとえばBS放送局のWOWOWでは、今年から実務経験型の他に「S O H O型」インターンシップ制度を実施する。このS O H O型は、昨年12月から放送を開始したBSデジタルラジオの「画面作成サポート」が主業務。ラジオ番組放送中にテレビ画面に写し出される静止画面のデザインを、提案してもらおうというもの

だ。6月末から募集を開始し、デジタルデザインされた自己紹介シートによる選考を行う予定。実際の活動は、番組のコンセプト、ターゲット、制作進行スケジュールなど、BSデジタルラジオ番組制作の現場の様子を学んだのち、テーマにそった画面デザインを行うことになる。提案されたものの中から、良い作品は実際の番組に採用していくという。

「デザインやイラストに興味があり、イラストレーターやフォトショップ等のソフトを使える方であれば、専攻は不問。遠距離の方もぜひ参加して欲しいですね」 ネットワークが普遍化した今だからこ

そでできる試みと、同制度を運営するWOW・マルチメディア局の菅野和佳奈さんは言う。センスがものをいうデザイン業務をS O H O型で体験できる、新しいインターンシップのスタイルだ。

一方、コミュニティサイトの構築・運営をビジネスの中核に置くガイアックスは、東京本社とは別に「京都ラボ」という研究開発部隊を京都に持っている。2000年4月からスタートした京都ラボは、登録した学生は時間を問わず、PCやネットワーク環境が整ったラボを自習形式で利用できる。わからない点は社員に相談することも可能。ここは学生たちがITスキルを自由に学べる場であり、身に付けたスキルをもとに製品開発やビジネスモデルを構築する機関でもある。

「日本には『学生は学ぶもの』という固定観念があるが、世界の、ことにIT分野では、学生が新潮流を生む震源なのです。学生時代にこそ、学び、そしてビジネス分野で活躍することが必要なんですよ」

同社代表取締役の上田祐司さんは、教育こそが業務を効率化する要であるとい、若手の教育をライフワークととらえている。IT分野を動かす人材は「学生」の中から出てくるのだ、そう意識を変えなくてはならないと彼は説く。

ただ学ぶのではなく、学生を実戦の世界に引っぱり出すという企業たち。誰よりも早くビジネスを実感したい人にとっては、願ってもないチャンスだろう。

### CASE STUDY

#### ベンチャーを肌身で知った上で正社員の道を選択

藤堂和幸さん  
ガイアックス 営業部



「ガイアックスというベンチャーが京都ラボというものを立ち上げるから、参加してくれないか」そう藤堂和幸さんが友人から誘われたのは昨年の3月29日。聞けば、4月2日にはオープンするという。慌てて翌日後をきめた4人が集い、彼らは結果として予定通りこの京都ラボの活動を開始させた。

「事務所の契約、内装、機材、電話回線の手配すべてをこの期間内に自分達でやりました。無茶苦茶ですよ(笑)」

彼らの人材募集努力と、IT系技術を学べる場というコンセプトの魅力が相まって、1カ月後には登録者が1000人を超え、6月には内15人ほどが制作したコミュニティサイトが立ち上がるなど、京都ラボの活動は具体的に、かつスピーディーな展開を見せた。運営担当として参加した藤堂さんだが、ベンチャーの魅力にとりつかれ、京都大学を卒業したこの4月から東京本社で正社員として勤務している。

「大学院進学とで大きく迷いましたが、学問の場にはいつでも戻れる。起業も射程に入れ、今はベンチャー経営の基本を体得したいと考えているんですよ」



上田祐司さん  
ガイアックス  
代表取締役



菅野和佳奈さん  
WONOW  
放送本部マルチメディア局  
デジタルラジオ編成制作員